

かみしなのかわ

上品野蟹川遺跡

所在地 瀬戸市上品野町地内

調査理由 国道 363 号線道路改良工事

調査期間 平成 13 年 10 月～平成 14 年 3 月

調査面積 5,550 m²

担当者 服部信博・木川正夫・武部真木



調査地点 (1/2.5 万「多治見・猿投山」)

調査の経過 調査は国道 363 号線道路改良工事の事前調査として愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として本年度は A, B, C, D の調査区に分割して実施した。これまでに (財) 瀬戸市埋蔵文化財センターによって平成 7 年と平成 10 年に調査され、愛知県埋蔵文化財センターでは平成 11 年度より調査を継続している。

立地と環境 遺跡は水野川と蟹川が合流する地点付近の標高 180m 前後の沖積地に立地している。現況は水田地帯であるが、近隣住民によれば戦時中は沼地であったのを改良し、芋などを栽培していたという。遺跡東方の丘陵上には中世城館跡の桑下城跡が、南方約 0.5 km には旧石器～近世の複合遺跡である上品野遺跡などが分布する。

調査の概要 調査範囲は、河川合流部付近に形成された平坦地の西北端に相当し、これまでに旧蟹川と思われる自然流路と丘陵斜面、自然流路に挟まれた微高地などの地形が確認されている。今回の調査地点は A 区と C a 区の一部を除いてほぼ全体が自然流路に含まれることがわかった。また、A 区の丘陵斜面では自然流路の縁に沿うように幅約 2 m、深さ 0.8 m の溝 SD01 を検出した。

自然流路は暗褐色砂質土層と青灰色粗粒砂～シルト層が拳大の礫層をはさんで堆積しており、表層では近世～近代の陶磁器や窯道具、上層の暗褐色粗粒砂層からは鎌倉～戦国時代の灰釉系陶器碗、小皿類と瀬戸・美濃産陶器、下層の暗褐色土層からは 8 世紀後半～9 世紀代を中心とした須恵器、灰釉陶器が含まれる。

注目すべき資料として B, D 区自然流路の主に下層から「文室門」(ふんやのもん) と墨書された陶器が合計 4 点出土している。灰釉陶器碗または皿が 3 点 (K -14 が 2 点、K -90 が 1 点) と須恵器碗 1 点であり、字体や筆致から 2 つのグループに分けられる。須恵器の墨書は K -14 の時期のものに近い。その他にも判読不能の古代の墨書 2 点がある。また、鉄鏃 2 点 (B, C 区)、川岸に近い浅瀬で陽物形木製品 1 点 (B 区)、緑釉陶器皿 1 点を検出した。昨年度調査では「山寺」「山」「阿」と「門」が判読できる墨書灰釉陶器が出土しており、平安時代竪穴住居 1 棟とピット群が検出された 00 A 区に隣接する今年度 C a 区に遺物の集中が認められる。「文室門」の意味は不明であるが、数少ない出土遺物の中でも墨書陶器の割合は高く、また川縁に単独で建つ住居もやや不自然な立地と感じられ、周辺が何らかの祭祀に関わる地点(施設)であった可能性が考えられる。

なお、包含層より古墳時代の土師器小型壺(松河戸 II) 1 点、古代の流路下層より青灰色粗粒砂～粘土質シルト層を約 1 m 掘り下げたところで縄文土器(後期)を検出した。

(武部真木)



A 区空測写真 (蛇行する SD01 の画面右側全体が自然流路)



B 区全景 (東から)



1



3

1



2

3

NR01 出土墨書灰釉陶器